

学道一如

発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2025年12月12日
第46号

バレーボール新人戦地区優勝

バレーボール部は12月6、7日に開催された小樽・後志高校新人戦バレーボール大会に出場し、小樽未来創造、小樽潮陵、小樽桜陽、俱知安と対戦し、全て2-0で破り、優勝した。部長の池田唯莉さん(2-3)に振り返ってもらった。

レシーブ・スパイク強化

「俱知安戦は1セット目の最初から流れが良かったのですが、他の3試合は練習してきたことを十分出し切れなかった」と言う。3年生が引退して、新チームになってからまだ日が浅く、練習不足は否めない。「もっとスパイクを打ちきる、レシーブで乱されないチームを」と20日からの私学全道大会に向けて、気持ちを引き締めている。

レシーブで乱されないチームに



出場選手

- 池田唯莉 (2-3)
- 長田倅奈 (2-3)
- 鈴木夢華 (2-3)
- 鈴木帆華 (2-4)
- 川原菜月 (2-4)
- 庄野悠月 (2-4)
- 笠井柚奈 (2-4)
- 丸山憧恋 (1-4)
- 青山柚羽 (1-2)



双葉歴史探偵事務所

□11□



小樽再発見② 小熊秀雄(2)生誕の地 複雑な生い立ちが作品に与えた二面性

小熊秀雄の手がかりを求めて、市立小樽文学館を訪ねた。学芸員の伊藤あやさんが対応して下さいました。
文学館・美術館では平成7年(一九九五年)に「小熊秀雄と池袋モンパルナス展―自由を求めた詩人と画家たち―」を開催しており、そのときの展示資料ならびに冊子を閲覧させていただきました。

上京するまでの半生 複雑な生い立ち

小熊秀雄は一九〇一年、小樽市稲穂町(小樽文学館側)に生まれた。父三木清次郎は洋服仕立人、母小熊マツ(入籍していなかった)は秀雄より7歳年上の異父姉ハツを連れ子していた。秀雄が3歳のとき、母マツ死去。姉のハツは養女に出され、後に料理屋に五百円で身売りされた。小樽の大火で一家は継母ナカの本籍地稚内へ移った。10歳のとき、父たちは樺太豊原へ移住。秀雄は2年間ほど秋田大館の伯母に預けられ可愛がられた。

様々な職に就く

樺太泊居の高等小学校2年卒

業後(15歳)、猟師手伝い、養鶏場番人、炭焼き手伝い、農夫、昆布拾い、伐木人夫、製紙バルプ工場職工などに従事、ほとんど独立の生活を営む。

小樽の川上呉服店で耽読

20歳になり、徴兵検査を受けていることを知り、驚き、怒り、以後小熊姓を名乗った。幼時に別れた姉が旭川に居ることを知り、17年ぶりに再会。職がなく、小樽の川上呉服店(色内町8丁目30)に半年くらい勤める。店主の信頼厚く、その家から借りた本を読み耽ったという。

旭川新聞社で文才を発揮

21歳のとき、姉ハツの世話で旭川新聞社に見習い記者として入社。社会部記者となったが、文才を認められ文芸欄も担当する。旭川新聞に童話や詩を次々と発表。ダダイズムに惹かれた。23歳のとき、「チルチル童謡・

童話会」を起こし、アンデルセンの童話を口演する。ロシア文学者湯浅芳子氏の編集する『愛国婦人』誌に童話「焼かれた魚」を発表。

展覧会に鮭を貼り付けた絵を出品。それを犬にかじられるという漫画入りの記事が紹介され評判になる。

つね子さんと結婚、長男誕生

24歳で崎本つね子さんと結婚。翌年長男焰(ほのお)誕生。

今野大力らと雑誌「円筒帽」創刊。この頃、旭川新聞に詩、小説、展覧会評など旺盛に発表。

27歳のとき、父が樺太で死去。継母を避け、東京に出る。

(詩集『長長秋夜』小熊秀雄賞 市民実行委員会編より抜粋)

▼幼少期のつらく厳しい生活が小熊の人間形成、作品の根幹を成していると思われる。虐げられた者や、弱い立場の人たちへのあたたかく優しいまなざしの作品を書いたのはこういう幼少期を送ったからだろう。

(第36回高文連上川支部図書研究会、氏家正実氏の講演より)

▼徴兵検査まで自らが「私生子」であることを知らなかった複雑な生い立ちをもつが、そのせいか人一倍孤独と寂寥にみちた詩作をのこした。詩句にはときとして一種リズムミカルな激情と饒舌がじゅうまんし、私生活も放縦をきわめて妻子を泣かせたが、それは小熊の心奥にひそむ狂おしいまでの「人恋しさ」の裏返しでもあったろう。(「小熊秀雄と池袋モンパルナス展」窪島誠一郎氏)

「自画像」(1938年)

一般的に自画像は自分の姿を良く見せたいという心理が働くものである。しかし、この作品には全くその意識がない。おどおどした目は正面を見ていない。頬に手をあてて不安そうにあらぬ方を見ている。まるで自分の顔を直視するのが怖いというふうである。ここには世の中の矛盾に果敢にあらがう小熊の姿はない。社会的にも家庭的にも矛盾だらけの自分に対する葛藤が直接的に画面に表れているのである。(前市立小樽美術館長 新明英仁氏)